

鹿児島および東北方言の語中カ行タ行の子音について

木部, 暢子
鹿児島大学法文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/11916>

出版情報 : 語文研究. 70, pp.1-13, 1990-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

鹿児島および東北方言の

語中カ行タ行の子音について

木 部 暢 子

はじめに

鹿児島県揖宿郡瀬娃町方言のカ行タ行子音については、以前に報告したことがある(拙稿「鹿児島県瀬娃町方言の語中有声化について」)。その概略をここでもう一度繰り返すならば、瀬娃町方言ではカ行タ行子音が語頭で〔k〕〔t(この中には破擦音の〔tʃ〕〔ts〕も含むことにする)〕、語中で〔g〕〔d(この中には破擦音の〔dʒ〕〔dz〕も含むことにする)〕である。ただしガ行子音が語頭で〔g〕、語中で鼻濁音の〔ŋ〕だから、カ行音とガ行音が混同することはない。しかしダ行子音は現在では鼻音性を失って、語頭でも語中でも〔d〕で現れるから、語中ではタ行音とダ行音が混同する。また語末の入声化とカ行タ行ガ行ダ行音との間には、

1. 語末の入声化が起こったときガ行ダ行は鼻音でなくてはならない。
2. 語中カ行タ行の有声化には連濁の法則が深く関係している。
3. 語中カ行タ行の有声化は語末の入声化(井上氏の語末狭母音の脱落から子音調音点の区別消失までの過程)より前でなくてはならない。

という関係が成り立ち、その結果カ行タ行子音が語中で〔g〕〔d〕となる現象は、かなり古くまで遡る可能性があるというものであった。ただ前稿では語例や語種も十分ではなかったし、連濁の法則にとらわれすぎていた嫌いがあり、無声母音のあと、促音のあと、撥音のあと、二重母音のイのあとでカ行タ行子音が〔g〕〔d〕とならないことに対する配慮に欠けていた。

本稿では前稿の不足を補いつつ、瀬娃町および東北方言の語中カ行タ行の子音についてもう一度考えてみたいと思う。本稿での立場は、カ行タ行子音が語中では〔g〕〔d〕であるのが古いというものであることを最初に述べておく。また瀬娃町方言の話者は前稿に同じく、西俊寛氏(昭和9年生)である。

1. 語末ギ・グ・ヂ・ヅの撥音化と鼻音性

語末にギ・グ・ヂ・ヅをもつ語、例えば「鍵、釘、杉、兔、筋、水、大豆」などは鹿児島県では一般に促音化するが、瀬娃町方言では撥音化して「カン、クン、スン、ウサン、スン、ミン、デン」となる。これは語末の入声化が起こったときに、瀬娃町ではギ・グ・ヂ・ヅが鼻音性を帯びた音だったからである。しかしギ・グとヂ・ヅとは、あきらかに

撥音化の程度に差がある。今回の調査でつぎのようなことがはっきりした。

- (1) 語末のギ・グはほとんど 100 パーセント撥音化する。これはガ行子音が現在でも鼻濁音であることを考えれば、当然のことだろう。
- (2) 語末のヂ・ヅに関しては、これが撥音化する語と促音化する語との二とおりがあ
る。「水、大豆、筋」では撥音化して「ミン、デン、スン」となるが、「屑」では「クッ」
がふつうで「クン」とは言わないとの回答があった。しかし [nogonsakun] という語
があって、これは「おがくず」のことだという。ついでにいうならば、現在の穎娃町
方言ではダ行の鼻音は聞くことができない。しかし老年層の人たちに訊ねると、自分
より年配の人、例えば自分の父母はダ行を鼻音で発音していたという。
- (3) ギ・グ・ヂ・ヅ以外に「粒、大粒、小粒」が撥音化して、[tʃun, utʃun, kotʃun] と
なることが分かった。ただしバ行の撥音化例は今のところこれ一例だけだから、古く
ビ・ブも撥音化するのが一般的だったかどうか（ひいてはバ行子音にも鼻音性があ
ったかどうか）は分からない。
- (4) ジ・ズの撥音化の例は、いまのところ得ていない。語末のジ・ズは無声化した [ʃ]
ないし [s] になる。例えば [kuʃ~kus (籤)] [kwaʃ~kwas (火事)] [kaʃ~kas
(数)]。しかし助詞の「を」や「に」が付いた場合には [z] の音が復活して、
[kuzu (籤を)] [kuzi (籤に)] [kwazu (火事を)] [kwazi (火事に)] [kazu (数を)]
[kazi (数に)] のようになる。

2. 漢語のカ行タ行子音

前回の調査では基本的な語彙が中心だったために、漢語が少なかった。今回、カ行音タ
行音の関係する漢語を三十語ほど調査語彙に加えた。漢語は穎娃町方言に取り入れられた
時期や使用の頻度、日常語化の程度など難しい問題も含んでいるが、とりあえず調査の結
果をあげてみよう。

① [g] [d] であるもの

kitegu (気笛を) segen (世間) degon (大根) sado (砂糖) nimod3a (荷物
は) nimod3u (荷物を) çimid3u (秘密を) fod3u (焼酎) hod3o (包丁)
joge (余計)

② [k] [t] であるもの

tʃo : kan (朝刊) ju : kan (夕刊) jo : kan (羊羹) gokan (五感) zikan (時
間) bjo : ki (病気) ze : kin (税金) zo : kin (雑巾) baikin (バイ菌)
d3iku (利口) d3iku2 (理屈) iken (意見) hoken (保健) ko : ko : (孝行)
ko : ko : (高校) kju : kon (球根) aikjo : (愛嬌) no : kjo : (農協)
senta2 (洗濯) jempitsu (鉛筆を) goten (御殿) Φuton (布団) zabuton
(座蒲団) gaitfu : (害虫) kju : tʃo : (級長)

これによると、語中のカ行タ行音が [g] [d] である①では同時に長音が短呼され、[k]
[t] である②では長音が短呼されずに長く発音されていて、語中の [g] [d] 音と長音短呼

のあいだにプラスの相関関係があることが分かる。

長音短呼は、顛娃町方言も含めて鹿児島方言の大きな特徴の一つであって、和語は勿論のこと、古く入った漢語でも例外なく長音短呼が起こる。長音が共通語と同じように一拍分の長さをもって発音されるのは、明治以降新しく取り入れた漢語や外来語だけである。これに有声化の例外が重なるというのは、漢語における有声化の例外も明治以降の新しい現象だからだと考えられる。(この長音は一拍分の長さを有してはいても、アクセント的には独立しない。「朝刊」は [tʃoːkan] (B型)、「夕刊」は [juːkan] (A型) のようなアクセントである)。

ただし漢語は、それぞれの地域における性格にかなり違いがあるようで、顛娃町方言と東北方言とでは [g] [d] の分布が一致しないことも多い。井上「東北方言の子音体系」と比較すると、「焼酎、包丁」は顛娃町でも山形県西村山郡河北町谷地でも [d]、「保健」は顛娃町でも谷地でも [k] だが、「羊羹、雑巾」は顛娃町で [k]、谷地で [g] である。

3. 無声母音のあとのカ行タ行子音

無声母音のあとのカ行タ行子音は [g] [d] にならない。これは顛娃町方言にも東北方言にも当てはまる法則である。ただし地域によってやや異りがある。例えば「鹿」「北」「人」のように「無声子音+狭母音+カ行タ行子音+広母音」という場合には、顛娃町方言でも一般の東北方言でも狭母音が無声化し、カ行タ行子音が [k] [t] で現れる。ところが山形県大島方言では、「前後の母音の広狭に支配されず、音声的にはすべての環境で有声化が起こる」(したがって [ʃiga (鹿)] [kida (北)] [ɕido (人)] となる) (井上「荘内・大島・山北方言の音韻(文法)分布」p.26) という。また「露」「菊」「靴」「口」のように「無声子音+狭母音+カ行タ行子音+狭母音₂」という場合には、東北方言一般で狭母音₁が無声化せず、カ行タ行音も「フギ、キグ、クツ、クツ」のように [g] [d] で現れる(東北方言に関する文献参照)のに対して、関東地方の「東北方言」では、このような場合にも狭母音₁が無声化し、カ行タ行子音が [k] [t] で現れる(井上「東北方言の子音体系」p.85、「言語の構造の変遷」p.271) という。一方顛娃町では、語末の狭母音が入声化して [ʔu₂, ki₂, ku₂, ku₂] となるが、「を」にあたる助詞がついたときには [ʔugu, kigu, kudʒu, kudʒu] となる。

顛娃町方言や一般の東北方言において、無声母音のあとでカ行タ行子音が [g] [d] にならない理由は、従来、音変化の順序として母音の無声化がまず起こり、そのあとカ行タ行子音の有声化が起こったために、無声化した母音のあとではカ行タ行子音の有声化が阻止されたからだと説明されてきた(宮島・井上文献参照)。しかしもしそうならば、大島方言ではカ行タ行の前では母音の無声化が起こらなかったのだろうか。また、「無声子音+狭母音+カ行タ行子音+狭母音₂」のとき、東北では狭母音は無声化しなかったのだろうか。

これについて宮島氏は「母音の無声化はところによって起こり方がちがっていた」(「母音の無声化はいつからあったか」p.39) といい、井上氏も「有声化以前に進行していた母音の無声化の環境の違いとして説明しうる」(「言語の構造の変遷」p.271) といっている。

しかし一方でまた井上氏は、「大鳥有声化規則の適用範囲がよよりも広く、すべての有声環境の t, k が有声化した」（「荘内・大鳥・山北方言の音韻（文法）分布」p. 27）、「大鳥方言のように孤立した方言では、「有声化」という現象の伝播を受容する時に、音韻規則の適用範囲を広げてしまった、という考えも可能である」（「言語の構造の変遷」p. 288）ともいっており、これは大鳥方言でも有声化以前、すでに母音の無声化が起っていた可能性があるということ配慮しての発言である。実際「スソ（裾）」「フサ（房）」などのサ行音の前の狭母音は、大鳥方言でも一般に無声化する（「荘内・大鳥・山北方言の音韻（文法）分布」p. 26）わけだから、カ行タ行音の前に限って無声化が起こらなかったとは考えにくい。

母音の無声化がカ行タ行子音の [g] [d] 化を阻止したという説は、説得力がありそうな気もするが、しかし細かな点になると説明しきれない部分が残るのである。ではこれを逆に、カ行タ行子音は語中でもともと [g] [d] だった、そこへ母音の無声化が起こり、その影響で後接する [g] [d] が無声化（[k] [t] 化）したと考えることはできないだろうか。

この考え方は大鳥方言を説明するには都合がいい。カ行タ行子音がもともと語中で [g] [d] だったとすれば、「前後の母音の広狭に支配されず、音声的にはすべての環境で有声化が起こる」ことも、カ行タ行音の前の狭母音が無声化しないことも、またそれに対してサ行音の前の狭母音が無声化することも説明できる。つまりサ行子音は語頭でも語中でも無声音だったから、その前の狭母音が無声化してもよかつたわけだが、カ行タ行子音は、もともと語中で有声音だったから、その前の狭母音は無声化しなかつたわけである。

穎娃町や東北方言一般の場合はどうだろうか。これらの地方で語中カ行タ行子音がもともと [g] [d] だったということを説明するためには、解決しなければならない問題が二つある。一つは「無声音子音+狭母音+カ行タ行子音 (g・d) + 広母音」において、どうやって狭母音の無声化と [g] [d] の [k] [t] 化が起こったかということである。従来いわれている無声化の条件はつぎのようなものであった。

標準語のせま母音音素 /i/ と /u/ は、無声音の子音音素にはさまれたとき、規則的に無声化する。（中略）

また、無声音の子音音素に先だたれた /i/、/u/ が単語のおわりにきて、単語のアクセント核がそれより前の音節にあり、かつ、その単語のあとに休止がある場合、そして、その単語が普通のイントネーションをもって発話される場合には、そのような短いせま母音音素は、その直前のせま母音音素が無声化されていないかぎり、無声化されて発音されることがある。（『言語学大辞典』第2巻 p. 1703）

この条件に従う限り、「無声音子音+狭母音+カ行タ行子音 (g・d) + 広母音」において、狭母音の無声化も [g] [d] の [k] [t] 化も起こりえない。

二つ目の問題は、やはり地域による差異である。カ行タ行子音が語中でもともと [g] [d] だったと仮定した場合、「無声音子音+狭母音+カ行タ行子音 (g・d) + 狭母音」（「蒨」「靴」「口」）のとき、一般の東北方言では狭母音の無声化も起こらないし、カ行タ行子音も [g] [d] のままなのに、関東の「東北方言」では狭母音の無声化が起こり、カ行タ行子音が [k] [t] になるのはなぜなのか、また穎娃町方言では単語単独のときには入声化

が起こるのに、助詞が付いたときにはなぜ [g] [d] のままなのか。

まず最初の問題、狭母音の無声化がいかんにして起こったか、について考えてみよう。これには頼娃町方言のつぎのような現象が参考になる。頼娃町もふくめて鹿児島県全般、長崎県の上五島、宮崎県の諸県地域では、シのあとの [r] が [t] になるという現象が見られる(『九州方言の基礎的研究』、上村孝二文献参照)。これはつぎのように [r] がいったんは [d] になり、そのあと直前の [ji] が無声化し、その影響を受けて [d] が [t] になったものだと考えられる。

柱	* hafira > * hafida > * hafida > hafita
知らん	* firan > * fidan > * fidan > fitan
白髪	* firana > * fidaŋa > * fidaŋa > fitaŋa
面白い	* omofire > * omofide > * omofide > omofite
後ろ	* ufiro > * ufido > * ufido > ufito

語中のカ行タ行の無声化もこれと同じで、つぎのように考えることができるのではないだろうか。

鹿	* figa > * figa > jika
北	* kida > * kida > kita
人	* Φido > * Φido > çito (* çido > * çido > çito)

鹿児島県方言のつぎのような現象も参考になるだろう。鹿児島では狭母音をもつキ・ク・シ・ス・チ・ツの音が、ナ行マ行音の前で無声化ないし促音化する。例えば「鹿児島」[あく巻き(食べ物の名前)]「きつね」のような単語は頼娃町で、[kaŋo 2 ma] [a 2 ma 2] [ki 2 ne] のように発音されるが、この [2] は非常に微妙な音である。「鹿児島」などは聞き方によって、[kaŋomma] [kaŋo 2,ma] [kaŋoima] [kaŋoçima] [kaŋoçima] の五とおりに聞こえ、実際はこれらの音が複雑に入り混じった発音である。またキ・ク・シ・ス・チ・ツの音がガ行ダ行バ行音の前にきたときにも、無声化ないし促音化する。例えば [taggoe (たちごえ、犬の遠吠え)] [tfuddon (お月さま)] [jaguba~jabba (役場)] [kubbaŋ (嘴)]。「唇」という意味の「スバ」などは、ほとんど [u] の母音が響かず、[sba] のように聞こえる。

これらのことから少なくとも鹿児島方言では、無声化の条件の見直しが必要になってくる。つまり「無声音の子音音素には含まれた狭母音」が無声化するのではなく、「キ・ク・シ・ス・チ・ツにおける狭母音が後ろの子音に関係なく」無声化するのである。

ところで上のような条件のもとに母音が無声化したとしても、無声母音のあとのカ行タ行子音 [g] [d] は無声化して [k] [t] になるのに、無声母音のあとのガ行ダ行バ行はなぜ [k] [t] にならないのかという疑問が新たに起こってくるかもしれない。それに関してはガ行ダ行子音が単なる有声音ではなく、鼻音性を持っていたからだと考える。つまり無声母音のあとに非鼻音性の子音が来ると、その非鼻音性の子音は直前の無声母音の影響を受けて無声化するが、無声母音のあとに鼻音性の子音が来たときには、その鼻音性ゆえに無声母音の影響を受けないと考えるのである。バ行子音がかつて鼻音性を有していたという証拠は現在の鹿児島方言には乏しいが、1. で述べたように、全然ないこともない。もっ

とも国語史の上からはバ行子音に鼻音性を認めることが定着している。いわゆる清音と濁音との対立を、[-有声音] 対 [+有声音] の対立としてとらえるのではなく、[-鼻音] 対 [+鼻音] の対立としてとらえ直す必要があるのではないかと思う。

	語頭				語中		
	両唇	歯茎	軟口蓋		両唇	歯茎	軟口
-鼻音	p	t	k	-鼻音	b	d	g
-鼻音	b	d	g	+鼻音	˜b	˜d	˜g
+鼻音	m	n		+鼻音	m	n	

東北方言においても母音の無声化の条件を頼娃町方言と同じように設定することができるのか、またナ行マ行ガ行ダ行バ行の前でも母音の無声化がごくふつうに起こりうるのかどうか、筆者にはよく分からない。柴田氏によれば/T/が/z/の前にも来る(「山形県小国町方言の音韻とアクセント」p.634)といい、井上氏も「促音の次に有声音が来うる」(「東北方言の子音体系」p.83)というが、井上氏のいう「有声音」がカ行タ行音の有声音で現れたものなのか、それともガ行ダ行ザ行バ行音なのか、はっきりしない。後藤利雄氏によれば「いわゆる中濁音(語中のカ行タ行音が[g][d]で現れたもの:木部注)は促音のあとへも平気でつく」(「山形方言の中濁音」p.3)という。これについては後に述べる。

鼻音性の問題に関連して、東北には「濁音の清音化」(橘「盛岡弁清濁音考資料」p.74)という現象がある。橘氏の用例からいくつか拾ってつぎに示そう。

- じ→じつ かじつか(鰻) ごじつかん(五時間) さじつかん(三時間)
 - ず→ずつ 未発見
 - ぢ→ぢつ ひぢつかげ(肘掛) えぢつくされ(意地腐れ) はぢつくづ(恥口、猥談)
 - づ→づつ わづつか(僅) くづつかご(肩籠) みづつばな(水漬)
 - び→びつ くびつかがり(首かがり) くびこ(頸こ) えびぢゃ(えび茶)
 - ぶ→ぶつ やぶつか(藪蚊) ねぶたエ(眠たい) やぶける(破ける)
- 清音化せざるもの あづぎ(小豆) こづぎ(乞食) すづぐ(零)

これを見ると、「濁音の清音化」はザ行ダ行バ行に起こり、ガ行には起こらない、「清音化」した音のつぎの子音も無声子音である、有声音のギ・グがつぎにくるときは「清音化」が起こらない、またジ・ヂ・ツが清音化してツになるところを見ると、「清音化」は四つ仮名の区別がなくなったあとに起こった変化だと考えられる、などの性格を持っているようだ。

鹿兒島方言でも似たような現象があり、揖宿郡大山町兒ヶ水では「おながめ(かまきり)」のことを「オンかメ」という(福里「山川町附近の方言について」P.44)らしい。筆者の調査では頼娃町で「肘」のことを[çintʃ]というのを聞いた。

ところで上のような現象は、「鼻母韻の鼻音が独立傾向を帯びたり、独立して一音節の鼻音となると、次の本来の濁音が清音となり母韻も無声化することが多い」(北条忠雄 講座方言学4『北海道東北地方の方言』p.176)と説明される。橘氏の上げた用例からすると、当該濁音に後接する子音が無声子音である場合に「濁音の清音化」が起こっているような節もあり、後接の無声子音が「濁音の清音化」を促したようにも見えるのであるが、「ヤン

タ(嫌だ)」「(北奥方言の発音とそのアクセント——ズーズー考——」p.36)、「マンツ(先ず)」「メンコイ(古語の「めぐし」)¹⁾」(講座方言学4『北海道東北地方の方言』p.176)などをみれば、必ずしも無声子音が後接する必要はなさそうである。むしろ「濁音の清音化」が先行して「本来の濁音が清音となり母韻も無声化」したために、後接の非鼻音性の子音〔g〕〔d〕〔b〕も無声化したという過程を考えるほうがよいかもしれない。²⁾

東北方言でガ行に「濁音の清音化」が起こらないのも興味深い問題である。あるいは「濁音の清音化」が起こった時期、ガ行子音の鼻音性はダ行子音やバ行子音の鼻音性とは異なり、入りわたりの鼻音ではなく、鼻濁音だったのかもしれない。

つぎに、語中カ行タ行子音がもともと〔g〕〔d〕だったというための第二の問題、「無声子音+狭母音+カ行タ行子音(g・d)+狭母音」(「蔭」「菊」「口」「靴」)について考えてみよう。この環境にあるカ行タ行子音は、東北方言一般では〔g〕〔d〕であるが、関東の「東北方言」では〔k〕〔t〕である。これに関しては、金田一氏のつぎのような文章が参考になる。

その無声化は、東京ほどでは無いこともまた注意されなければならぬ。汽車・汽船・北・鹿・薬・助等に於ては無声化するが、東京では、それらばかりではなく、です・ます・荷物・お菓子・マッチなどの語尾の〔u〕〔i〕も、脱落若しくは無声化するが、東北では、これらの音は曇った〔w〕〔i〕であるに係らず、無声化せずに有声に響くのである(「北奥方言の発音とそのアクセント——ズーズー考——」p.38)。

これによれば、東北では語尾の狭母音がいかなる場合にも無声化しないのである。たとえさきに修正した無声化の条件により狭母音が無声化しようとしても、狭母音に有声音を保とうとする力が強く働いていれば、カ行タ行子音の無声化は起こらないかもしれない。それに対し関東の「東北方言」では、語尾の狭母音が無声化しやすかったということが、その直前のカ行タ行子音の無声化を助けたのかもかもしれない。³⁾

	蔭	靴
東北方言一般	*Φugi > *Φugi > Φugi	* kudzu > *kudzu > kudzu
関東の「東北方言」	*Φugi > *Φugi > Φuki	* kudzu > *kudzu > kutsu

「濁音の清音化」において「あづぎ(小豆)」「すづぐ(雫)」など有声音のギ・グがつぎにくるときには「濁音の清音化」が起こらないのも、「小豆」「雫」の語末のギ・グが有声音のまま保たれたことが原因かもしれない。

額娃町方言の場合、語末の狭母音が規則的に脱落する。さきに1、で述べたように、鼻音性を持つ音は母音が脱落して撥音になるが、鼻音性を持たない音は母音が脱落して声門閉鎖音になる。したがって「蔭」「菊」「口」「靴」などは、単独では〔Φu₂〕〔ki₂〕〔ku₂〕〔ku₂〕のようになるが、助詞が付いたときには語末の狭母音と助詞が融合して〔g〕〔d〕で現れる。これはつぎのような過程をへたものと思われる。⁴⁾

	蔭	靴
単独	*Φugi > *Φug > *Φuk > Φu ₂	* kudzu > * kudz > * kutʃ > ku ₂
は	*Φugiwa > *Φugja > Φuga	* kudzuwa > kudza
を	*Φugiwo > *Φugjo > *Φugju > Φugu	* kudzuwo > * kudzo > kudzu

4. 促音のあとのカ行タ行子音

促音のあとのカ行タ行子音は、顛娃町方言でも東北方言でも [g] [d] にならない。この理由は、促音化するとき、その一つ前の段階として無声化の過程を経ていると考えれば、無声母音のあとの場合に準じて説明できる。例えば、顛娃方言の「二日」「立った」「生きた」は、

二日 *Φud₃uga > *Φut₃fuga > *Φut₃fuka > Φukka
 立った *tadida > *tadida > *tatida > *tatita > tatta
 生きた *igirida > *igirida > *igirita > igitta

のような過程を経ていると考えることができる。

ところで顛娃町方言では促音のあとに有声音も来ることができる。ただしこの有声音はガ行ダ行バ行音相当の音であることはさきに述べた ([taggoe (犬の遠吠え)] [t₃fuddon (お月さま)] [jaguba~jabba (役場)] [kubba₃f (嘴)])。東北方言でも「促音の次に有声音が来うる」(「東北方言の子音体系」p. 83) というが、井上氏の上げた例、[mid₃da] 見ている、[ud₃de] 売れて、[tog₃ge:] 遠い、[ag₃ga] 有るか、などをみると、これはどうもカ行タ行音相当の有声音のようである。後藤氏によると、

{ アッタ (会った。有った)
 { アッだ (〔天気などが〕荒れた) (平仮名は後藤氏のいう中濁音：木部注)
 { カッてコイ (買ってこい。勝ってこい)
 { カッでコイ (借りてこい)
 { キッて (切って。切手)
 { キッで (切れて。着たい。切りたい)
 { アッツ (あっち)
 { アッづ (有るよ)

のように、促音のあとに来る有声音はいずれもカ行タ行音相当の音で、ガ行ダ行音相当の音ではない。注目すべきは、ハ行ラ行四段活用動詞の音便のときには促音のあとが無声音になっているのに、レ・リ・ルなどラ行音が促音化したときには促音のあとが中濁音(有声音)になっていることである。思うに、これは促音化の起こった時代の差を反映しているのではないか。四段動詞の音便は、レ・リ・ルなどラ行音の促音化よりよほど古く、つぎのような過程をへたものと考えられる。

会った *arida > *arida > *arita > atta または *arida > *arida > *adda > atta

それに対しレ・リ・ルなどの促音化は新しい変化であるために、促音のあとでもカ行タ行が有声音のまま現れているのである。今後この有声音も無声音化することが考えられ、山形県最上地方では実際に、kuddja > ku₃ cja (呉れた)、kuddje > ku₃ cje (呉れて) の変化が世代差として進行中であるという(井上「言語の構造の変遷」P. 288)。

顛娃町方言では、カ行タ行相当の有声音が促音のあとに来ることは決してない。促音の

あとの有声音は必ずガ行ダ行バ行相当の音である。レ・リ・ルの音は顛娃町方言でイ音便ないし促音便を起こすが、このときもイ音便のあとのカ行タ行音は無声音である。

5. 撥音のあとのカ行タ行子音

撥音のあとのカ行タ行音も顛娃町方言・東北方言ともに [g] [d] ではなく [k] [t] である。例えば「せんたぐ (洗濯)」「せんかう (線香)」「ほんたう (本当)」「こんたな (こな)」「たんと、うんと (沢山)」「(北奥方言の発音とそのアクセント——ズーズー考—— p. 36)、[binta (頭)] [sen ka (しないか)] (顛娃町方言)。この他にも漢語に例が多いが、漢語の場合にはその漢語を取り入れた時期が新しいと [g] [d] にならないという性質があって、撥音のあとの用例として必ずしも適切とはいえない。

撥音のあとではなぜ [g] [d] ではないのか、この理由もカ行タ行とガ行ダ行子音の弁別特徴が鼻音性の有無であるという面から説明できるのではないかと思う。語中でカ行タ行とガ行ダ行が鼻音性の有無により [g] [d] 対 [ŋ] [ŋd] で対立していたとすると、撥音のあとでは [ŋg] [nd] 対 [ŋŋ] [nŋd] の対立になってしまうが、これでは対立をなさない。そこで撥音のあとでは [ŋk] [nt] 対 [ŋŋ] [nŋd] で対立を保っていたのではないかと思う。⁵⁾

ここで説明しなければいけないのは、顛娃町方言のマ行バ行四段活用動詞音の便形では [tadzunda (畳んだ)] [hagunda (運んだ)] のように、撥音のあとに [d] が来るという事実である。そのうえ顛娃町のマ行バ行四段活用動詞は、古く撥音便ではなくてウ音便を取っていたようだから、事情はもう少し複雑である。⁶⁾ これはつぎのような過程をへていると考えられる。

畳んだ *tadamida > *tadaūda > *tadaūda > *tado : ̄da > *tadzūda > tazdunda

運んだ *hagobida > *hagoūda > *hagoūda > *hago : ̄da > *hagūda > hagunda

つまりこのダは最初から撥音のあとという環境にあったわけではなく、もとはウ音便のあとに来て、鼻音性のあるダだったのである。ところがのちに鼻音性が [n] として独立してしまったために、撥音のあとに [d] が立つことになってしまったわけだ。

東北方言のマ行バ行四段動詞音便形は撥音便を取り、そのあとの「た」は [da] になるが、これは「カ行・タ行子音有声化との相対年代に関して有効な手がかりを与えない。サ行の差シタ、タ行の立ッタ、ナ行の死ンダ、バ行の呼ンダ、マ行の読ンダ、ガ行のコイダ等は、音便変化と有声化のどちらが先に起こっても、現在と同じ形が出てくる」(井上「言語の構造の変遷」 p. 275) という。

6. 二重母音のイのあとのカ行タ行子音

最後に二重母音のイのあとについて考えてみよう。顛娃町方言ではリ・ル・レがイ音便を起こして、[hai (針、春)] [koi (これ)] のように二重母音を作る。そしてこのあとではカ行タ行音が [g] [d] ではなく [k] [t] で現れる。例えば [haika : (針から、春から)] [koika : (これから)] [ŋuika (古い)] [mammaika (丸い)]。

注意すべきは同じイ音便でも、カ行動詞サ行動詞のイ音便の場合にはカ行タ行音が [g] [d] で現れるということである。もっともこのようなイは、現在では直前の母音と融合してしまっているから二重母音を作っていない。例えば [keda (書いた)] [migeda (磨いた)] [wageda (沸かした)] [oreda (下ろした)]。

これはちょうどさきに見た、東北方言においてリ・ル・レが新しく促音化するという現象に似ている。顛娃町のリ・ル・レのイ音便もカ行動詞サ行動詞のイ音便に比べると断然新しい現象である。そのために直前の母音との融合も起こらない。ただしカ行動詞サ行動詞のイ音便のあとではカ行タ行音が [g] [d] で現れ、リ・ル・レのイ音便のあとではカ行タ行音が [k] [t] で現れるところを見ると、つぎのような変化を考えなければならない。

磨いた *miŋagida > *miŋaida > miŋeda
 沸かした *wagafida > *wagafita > *wagaita > *wageta > wageda
 古い *Φuruga > *Φuriga > *Φuriga > Φuika
 丸い *mammaruga > *mammariga > *mammariga > mammaika

鹿児島方言のリ・ル・レのイ音便は、母音の無声化ではなく [r] が脱落したとする説がある (講座方言学9『九州地方の方言』 p.306 など)。これは広い母音のラが [ka:da (体)] [jikka: (してから)] のように [r] を脱落させることがあるから、それに歩調を合わせた説明だが、この説明ではリ・ル・レの [r] が脱落したあとではなぜカ行タ行音が [k] [t] なのか説明することができない。やはりこれは、母音の無声化と考えるべきだろう。

おわりに

以上見てきたように、カ行タ行子音が語中でもともと [g] [d] であったとしても、無声母音のあと、促音のあと、撥音のあと、二重母音のイのあとでカ行タ行子音が [k] [t] になることが十分説明できるのである。大鳥方言などは、むしろこのように考えた方がいいような方言だ。そうすると従来「カ行タ行の有声化」と呼ばれていた現象は一転して、「カ行タ行の無声化」と呼ばなければならない。カ行タ行は語中で有声音であるのが本来の姿であって、無声母音のあと、促音のあと、撥音のあと、二重母音のイのあとのような、ある特殊な環境においてのみ、無声化が起こったからである。

サ行音に関してはこれまでほとんど触れずにきたが、1990年7月29日～8月3日に行なった鹿児島県川辺郡知覧町の調査で、つぎのような注目すべき現象を見つけた。

腰が痛い ko | zuga ita | ka
 星が ho | zuga
 足が痛い azu | ga ita | ka
 菓子屋 kwad | dʒa

知覧町は顛娃町の西隣の町だが、郡を異にしている。言語的にもカ行タ行子音が語中で [g] [d] ではなく [k] [t] であるなど、顛娃町とは一線を画している。ところがここでは上記のようにシの子音が語中で [z] になるのである。これらは単独では [ko:s (腰)]

[ho:s (星)] [as (足)] であるが、助詞の「が」が付くと [z] の音が現れ、助詞の「を」「をば」が付いたときにも [z] の音が現れることがある。例えば、[kozu (腰を)] [kozuba (腰をば)] [hozu (星を)] [hozuba (星をば)] [azu (足を)] [azuba (足をば)]。調査の範囲では「が」が付いたときにもっとも [z] が現れやすかった。またアクセントから分かるように、音声的には有声音の [zu] で現れても、この [zu] は一音節としての独立性を持っていない。

知覧町ではまた、「火事」「数」などの末尾の [ʒi] [zu] が無声化して [kwas (火事)] [kas (数)] となり、これに助詞「が」が付いても [kwasga (火事が)] [kasga (数が)] のように無声化したままのことが多いから、一見スとズが逆になっているような印象を受ける。

このような現象は、じつは颯娃町のいちばん知覧町寄りの集落、大川という所でも耳にした。大川のことばは、ガ行子音が鼻濁音であったり、語末のギ・グが撥音化したり、また語中のカ行タ行子音が [g] [d] で現れたり、全体的には颯娃町方言の特徴を持っている。それでいてシが [zu] で現れるから、颯娃方言と知覧方言の両方の特徴を備えているということになる。

シが [zu] で現れる方言がどのくらいの広がりを持っているのか、またシだけでなくサ・セ・ソも [z] で現れるというような痕跡がないものかどうか、サ行も語中では有声音だったのか、など一切は今後の課題である。

<注>

- 1 「メンコイ (古語の「めぐし」)」においてどの段階で「濁音の清音化」が働いたのかがよくわからない。例えば「メグキ」の段階で「濁音の清音化」が働いたとすれば、あるいは末尾のキが無声音であったことが「濁音の清音化」を起こさせた原因かもしれない。しかし「メグイ」や「メゴイ」の段階で「濁音の清音化」が働いたとすれば、「濁音の清音化」には後接の子音が無声音であることは関与していないことになる。
- 2 もし、カ行タ行子音は本来語頭でも語中でも [k] [t] で、のちに語中で有聲化が起こったという立場に立つとすれば、「濁音の清音化」はつぎのような過程を経たと説明できるだろう。カ行タ行音がまだ語中で [k] [t] の時代に、[k] [t] の直前の狭母音が無声化し、さらにその前の本来の濁子音も無声化した、カ行タ行音の有声化はそのあとで起こった。もしそうならば、カ行タ行の有声化は、四ツ仮名の混同以後のことになるはずである。東北方言でいつ頃四ツ仮名の混同が起こったのか、筆者には分からない。あるいは都よりも早かったという可能性もあるが、いずれにしてもカ行タ行の有声化の相対的年代を知る上で、四ツ仮名の混同との関連を見逃すことはできない。
- 3 この問題は母音の無声化のあとでカ行タ行の有声化が起こったという立場に立っても説明できるかもしれない。東北方言一般では語尾がどのような場合にも無声化しないから、「無声子音+狭母音+カ行タ行子音 (k・t) +狭母音。」(「蔭」「菊」「口」「靴」) のカ行タ行子音は有聲化することができた、それに対し関東の「東北方言」では語尾の狭母音が無声化するから、カ行タ行子音は有聲化することができなかった、と。しかし東

北一般の場合、たとえ狭母音が無声化しなかったとしても、無声子音に挟まれた狭母音は無声化する可能性があるから、カ行タ行も無声音のまま残るはずだが、実際はそうではない。

	落	靴
関東の「東北方言」	*Φ _u ki > Φ _u ki	*k _u t _s u > k _u t _s u
東北方言一般	*Φ _u ki > *Φ _u ki (実際には Φ _u gi)	*k _u t _s u > *k _u t _s u (実際には kudzu)

- 4 もし母音の無声化のあとでカ行タ行の有声化が起こったという立場に立つとすれば、単独の〔Φ_u 2 (落)〕〔ku 2 (靴)〕はいいとしても、「は」や「を」が続いたときはカ行タ行音の前の母音が無声化するから、つぎのように実情に合わない形が出てくる。(これについて詳しくは拙稿参照。)

	落	靴
は	*Φ _u kiwa > *Φ _u kja > *Φ _u ka (実際は Fuga)	*k _u t _s uwa > *k _u t _s fa (実際は kudza)
を	*Φ _u kiwo > *Φ _u kjo > *Φ _u kju > *Φ _u ku (実際は Φ _u gu)	*k _u t _s uwo > *k _u t _s fo > *k _u t _s fu (実際は kudzu)

- 5 井上氏は「鹿児島方言有声化の相対年代」の中で、鹿児島県揖宿郡山川町大山大で「絹から」が〔kingaj〕ではなく〔kiŋkaj〕になることを、狭母音の脱落が先行し、そのあとで有声化が起こったからだとして説明している。しかし仮に狭母音の脱落がまず起こって〔*kiNkaj〕になったあとで有声化が起こったとしても、〔n〕のあとで有声化が働かないことに対する音声的理由がない。
- 6 ゴンザの「日本語会話入門」でも、マ行バ行動詞がウ音便をとっている。例えば、「nusda (盗んだ) (569)」「jogoda (曲がっている) (28)」。
- 7 *tado : ɾda > *tadɟuda の変化は音韻法則からはずれた変化である。鹿児島方言は室町時代の開音を〔o〕で、合音を〔u〕で伝えている。それからいくと〔*tado : ɾda〕は〔*tadōda〕となるべきなのに、そうはなっていない。動詞にはこのような開合の混乱例がしばしば見られ、特に〔aruda (洗った)〕〔naruda (習った)〕〔haruda (払った)〕など、〔r〕のあとにおいて目立つ。「畳む」は〔r〕ではないが、開合の例外になっている。これに関して詳しくは上村孝二「九州方言の方言文法雑考」参照。
- 8 ガ行四段活用動詞は〔ninda (脱いだ)〕〔konda (漕いだ)〕のようになるから、
 脱いだ *nuŋida > *nuŋda > *nunda > pinda
 (頼娃町では共通語の「ヌ」が「ニ」または「ニュ」で現れる。例えば〔nukka, nikka (暑い)〕〔nijito (盗人)〕)
 漕いだ *koŋida > *koŋda > konda
 のようにイ音便を起こさずに撥音便を起こしたようである。

〈文献〉

- 井上史雄 1968 「東北方言の子音体系」(『言語研究』52)
—— 1974 「荘内・大鳥・山北方言の音韻(文法)分布」(『山形方言』11)
—— 1979 「鹿児島方言有声化の相対年代」(『方言研究年報』4)
—— 1980 「言語の構造の変遷—東北方言音韻史を例として—」(大修館『講座言語』第1巻)
上村孝二 1957 「南九州方言音の分布を中心に—内破音・鼻音化その他—」
(鹿児島大学文理学部紀要「文科報告」6)
—— 1976 「九州方言の方言文法雑考」(『鹿児島短期大学研究紀要』18)
木部暢子 1990 「鹿児島県頰娃町方言の語中有声化について」(『国語国文薩摩路』34)
九州方言学会 1969 『九州方言の基礎的研究』(風間書房)
金田一京助 1932 「北奥方言の発音とそのアクセント——ズーズー考——」
(『音声の研究』5)
国書刊行会 1982 講座方言学4『北海道東北地方の方言』
—— 1983 講座方言学9『九州地方の方言』
後藤利雄 1960 「山形音のダ行鼻濁音について」(『山形方言』5)
—— 1962 「山形方言の中濁音」(『山形方言』7)
斉藤義七郎 1959 「山形県北山村郡東根町」(『日本方言の記述的研究』)
三省堂 1989 『言語学大辞典』第2巻「日本語」
柴田 武 1950 「山形県小国町方言の音韻とアクセント」(『国語国文』23-11)
—— 1953 「山形県大鳥方言の音素分析」(三省堂『言語民族論叢』)
橋 正一 1933 「盛岡弁清濁音考資料」(『方言』3-5)
福里栄三 1931 「山川町附近の方言について」(『方言』1-3)
宮島達夫 1961 「母音の無声化はいつからあったか」(『国語学』45)